様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０３１２

研究課題名（和文）抵抗とトリック―カリブ海地域の文学におけるAnancy Storiesの系譜

研究課題名（英文）Resistance and Tricks: The Genealogy of Anancy Stories in Caribbean Literature

研究代表者
岩瀬　由佳（IWASE, Yuka）

東洋大学・社会学部・准教授

研究者番号：６０５９５４１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：アフリカ人奴隷とその子孫たちによって語り継がれてきた西アフリカ、アカン族の神話に由来するカリブ海地域の民話、Anancy Storiesは、子供向けの物語であり、一般的に被植民者の間では「価値のないもの」として認識されてきたが、旧英領カリブ海地域出身の現代作家たちは敢えてそのAnancy Storeisを作品に取り込み、抵抗や反逆心を「笑い」で偽り装うことで生き抜く術を探り、脱線と迂回を繰り返しながら強者（支配者）を欺こうとする弱者（被植民者）を体現するアナンシーの物語に秘められた語りの芸術を植民地主義への文学的カウンターアプローチとして創造的に用いていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Anancy stories, Caribbean folktales from West African mythology that can be traced to the Akan people of the Ashanti state in Ghana, have been passed down for centuries by African slaves and their descendants. Anancy, the symbol of wit’s triumph over cruel strength, is a trickster who can camouflage his resistance to his enemies with laughter to survive. Historically, the colonized in the Caribbean have regarded these stories as insignificant tales for children, but many modern Caribbean writers including Erna Brodber and Pauline Melville dare to incorporate them into their works and ambitiously create new Anancy stories as a literary counterattack against colonialism.

研究分野：英語圏文学

キーワード：Anancy Stories　カリブ海地域の文学　ポストコロニアリズム　ジェンダー研究　アフリカ系作家　民話

１．研究開始当初の背景

奴隷貿易により、アフリカ人奴隷たちとともにカリブ海地域にもたらされた Anancy Stories (Anansi など表記には諸説あり) は、Gail Johnson らによれば、本来、ガーナのアシャンティ州、Akan 族の神話に由来するとされ、植民地経営のために連行されたアフリカ人奴隷たちによって語り継がれ、現在もカリブ海地域を中心に広く知られた民話である。Anancy とは「蜘蛛」の化身であるが、状況によって変幻自在に姿を変え、危機的な状況をするりと切り抜ける機知、敵を欺くしたたかさをもつトリックスターでもある。強者を煙に巻いて困難を乗り越える Anancy は、黒人奴隷たちにとって英雄的存在であり、奴隷制の苦しい状況下で生き抜かねばならなかった黒人奴隷たち自身と強者に打ち勝つ弱者のシンボルでもある Anancy の存在が重ね合わせられてきたのだと考えられている。そういった意味から、Anancy には、アフリカの文化的遺産の側面と支配的な植民者に対する「抵抗」の伝統的文脈が存在しているといえるだろう。しかしながら、カリブ海地域に独特の英語（Creole：混交言語）や patois(方言)によって語られ、書き留められたその物語は、主にアフリカ文化に根ざしているものの、支配者側の言語文化、奴隷制撤廃後に流入したアジア系年季労働者の影響を受け、多種多様な文化、言語が交錯するハイブリッドな世界観も内在している。

Belinda Edmondson は、Anancy Stories をカリブ海地域における「初期文学」であると位置づけているが、宗主国イギリスの文化、特にヴィクトリア朝中産階級的価値観が優位にある植民地で、Anancy Stories の文化的価値、自分たち独自の文化、言語に対する誇りを広く一般に広め、認識させることに大きく貢献したのは、ジャマイカを代表する女優であり、詩人、民族学者でもあった Louise Bennett である。Miss Lou として人気テレビ番組に登場し、British English が社会的に重要視されている中で、 Jamaican Creole を駆使しながら Anancy Stories を語りかけた彼女は、一般国民のみならず、被植民者側のエリート層にも多大な影響を与え、V.S. Naipaul, Derek Walcott, Claude Mckay ら著名な作家たちが作品の中で Creole を用いることのきっかけを与えたとされている。彼女は、自らも Anancy Stories に関する著作を出版しているが、主に Walter Jekyll が収集した Anancy Stories に依拠していたとされる。そのため、本研究でも、Anancy Stories に関しては、主に W. Jekyll が幅広く収集した資料をもとに、研究を進めることとした。

私自身、ロンドン大学大学院に留学中にカリブ海地域の文学に出会い、それから十数年間にわたり研究を続けてきたが、この Anancy Stories と文学の関連性についての研究論文、評論が極端に少ないことが明らかであった。代表的なものとして、Helen Tiffin の“The Metaphor of Anancy in Caribbean Literature”(1982)や Joyce Jonas の *Anancy in the Great House*(1990)などが挙げられるだろうが、国内外において、その関連性が大きく研究テーマとして取り上げられてきてはいなかった。

これまで Anancy Stories は民俗学系、カリブ海地域の文学は文学系、というようにそれぞれ個別分野として研究されることがほとんどであったが、本研究においてその二つをともに通時的、かつ共時的側面から研究するという本研究の試みは、非常に挑戦的で独創的であると想定された。

２．研究の目的

本研究は、西アフリカの神話に起源をもつとされ、黒人奴隷たちとその子孫によって数世紀の時をこえて語り継がれてきた民話、Anancy Stories が、現代の英語圏カリブ海地域の文学にどのように受容され、いかにその中で変容を遂げてきたかについて、時代変遷を踏まえながら、ポストコロニアル、エスニシティ、ジェンダーの視座から考察することを目的とした。

本来、Anancy Stories は、歌や踊りをともなうパフォーマティブな「語り」のスタイルであったが、文学作品に取り込まれる際にどのようにその「語り」が変容し、そこにどのような効果が生まれるのか。また、Anancy Stories を敢えて作品の中に取り込もうとする各カリブ作家の意図が、植民地社会の時代背景、政治思想とどのようにリンクしているのか、更にポストコロニアルの現代からみた Anancy Stories のもつ可能性の豊かさについて本研究を通じて明らかにしようとした。

カリブ海地域における Anancy Stories は、間違えなく植民地主義の文化的遺産のひとつであるが、そこには常に黒人奴隷、被植民者たちの「抵抗」と、支配者たちを機知と狡猾さによっていかに欺くか、そして生き残るかといった「トリック」の要素を含んでいると思われる。その「抵抗」と「トリック」を後の作家たちがどのように文学作品の中で昇華させているのかを分析、調査することは、植民地主義への被植民者知識層による文化的「異議申し立て」を探るものであり、「暴力」ではなく「知」による植民地主義へのカウンターアプローチとして「文学」のもつ力の可能性を顕在化させるであろう、意義ある研究であると考えた。

３．研究の方法

第一に、本研究の目的を達成するために、国内だけでなく、イギリスの大英図書館（The Reading Room）、ロンドン大学図書館、西インド諸島大学付属図書館（ジャマイカもしくはトリニダード）において広く資料、文献を求めることにより、より論拠の確かな論文執筆に役立てる計画を立案した。また本研究は、研究分担者のいない個人研究であることか

ら、個人的に資料を収集、分析することを主とした研究活動であるが、海外の研究者たちとの意見交流の場として、研究の方向修正の機会として、積極的に国際学会を利用し、当研究分野に関する見識を高めていく研究方法の実施計画を立てた。

各年度の具体的な研究方法は、以下の通りである。

(1)平成 25 年度:

主にカリブ海地域に伝わる Anancy Stories の収集、日本国内で入手不可能な資料、文献に関しては、旧宗主国であるイギリスの大英図書館において、調査、収集を行うという当初の計画に基づき、7 月 27 日から 8 月 1 日までイギリスへ渡航し、ロンドンのブリティッシュライブラリー(The Reading Room)において、文献調査を行った。絶版で手に入らない Louise Bennett の本をはじめとして、大変貴重な資料を閲覧することができた。またこの調査期間中に、恩師でもあるロンドン大学元教授と本研究に関して様々な意見交換、貴重なアドバイスを得ることができた。Bennett が収集した Anancy Stories と子供向けの Anancy の絵本、Walter Jekyll の著作を中心に分析を行った。世界の研究者たちと意見交換し、研究視野を広げるために国際学会への参加を予定していたが、円安の影響で、イギリス滞在・渡航費が当初の見積りより高くなってしまったため、25 年度は参加を断念することになった。

(2)平成 26 年度：

英語圏カリブ海地域出身の作家たちのなかで、Anancy Stories を取り入れている作品を中心に分析するとした計画通りに、Erna Brodber と Pauline Melville 作品を中心に研究を進めた。北海道大学で開催された国内学会での発表をもとに、更なる調査、分析を推し進めた。25 年度に断念した国際学会へ 6 月 30 日から 7 月 7 日の日程で参加し、海外研究者との交流のなかから新たな研究のアイデアや刺激を受けることができた。本来の予定では、Derek Walcott、Wilson Harris、Edward Brathwaite、 Andrew Salkey らの作品を中心に分析を進める予定であったが、男性作家の作品を読み進めるのと並行して、Brodber、Melville、 Bennett 作品に関しても調査を行うことにした。2 月に西インド諸島大学の付属図書館での文献調査を行う予定であったが、イギリスの学会参加のための費用額が当初の予定以上になってしまったため、断念した。

(3)平成 27 年度：

植民地の社会的背景をたどりながら、各作家の Anancy Stories の受容スタイル、その特色と効果、受容に関する作者の意図等について比較分析を行った。そこで浮かび上がるコロニアルからポストコロニアル移行に伴う受容の変遷、ジェンダー間の受容の差異等も調査対象とするという当初の計画に基づき、研究を遂行した。8 月頃にロンドン大学図書館での補完的な文献調査を予定していたが、7 月に参加したイギリス・バーミンガムでの国際学会発表の際の費用額が、当初の見積り以上に達したため、残念ながら断念した。その代替案として、JSTOR 文献サイトを利用することにより、数多くの参考文献を収集することができた。

４．研究成果

カリブ海地域において Anancy Stories は、子供向けの物語であり、一般的にも「滑稽で価値のないもの」として広く認識されてきたが、旧英領カリブ海地域出身の現代作家たちは、敢えてその Anancy Storeis を作品に取り込むことにより、抵抗や反逆心を「笑い」で覆い隠しながら生き抜く術を探り、脱線と迂回を繰り返しながら強者（支配者）を欺こうとする弱者（被植民者）を体現するアナンシーの物語に秘められた語りの芸術を自らのテクスト上で創造的にアレンジを加えて再生成させている。そこには、植民地主義への文学的反撃が示唆され、宗主国の価値観へのアンチテーゼとして、自分たちのルーツである「アフリカ」の再認識を提示していることが本研究を通じて明らかになった。特にアフロ・カリブ系女性作家の Erna Brodber と Pauline Melville の作品には、その傾向が顕著であり、彼女たちのマジックリアリズム的な作風と Anancy Stories の相性が非常に良いことにも起因していると考えられる。

各年度の研究実績の概要は、以下の通りである。

(1)平成 25 年度：

初年度には、主にカリブ海地域に伝わる Anancy Stories に関する資料、論文、作品について広く収集活動を行い、それを分析する作業を行った。この一年間で収集した関連資料が膨大であったため、それを読み込み、分析するのにかなりの時間が取られたが、Anancy Stories 成立に至る歴史的背景、および社会的評価の変遷に関して多くの知識を得ることができた。

7 月 27 日から 8 月 1 日にかけて本研究費を使用した海外研究をイギリス・ロンドンのブリティッシュライブラリー（The Reading Room）にて行い、貴重な資料を閲覧、収集することができた。また、調査期間中に恩師のロンドン大学元大学教授から有意義な助言と意見交換を行えたことも本年度の大きな収穫であったと考える。

(2)平成 26 年度：

研究成果の第一弾として、5 月 24 日北海道大学で開催された第 86 回日本英文学会において「Anancy Stories の系譜―Erna Brodber と Pauline Melville 作品にみるその影響とトリック」というタイトルで学会発表を行った。アフリカから強制連行された黒人奴隷た

ちによってカリブ海地域を中心に語り継がれてきた Anancy Stories の歴史的背景を追いながら、特に Anancy Stories の重要性を広く再認識させるうえで大きな役割を果たしたと考えられる Louise Bennett の功績を明確にした。Bennett と同郷ジャマイカ出身である Erna Brodber 作 Jane and Louise Will Come Soon Home (1980)に Bennett の影響が色濃く反映させていることを数多くの資料をもとに論証できた点は、今年度の研究成果の大きなひとつと考える。 また、旧ガイアナ出身でイギリス移民作家である Paulien Melville の短編集 Shape-shifter（1990）における Anancy Stories の変容のかたちと比較することにより、Brodber と Melville 作品のなかで Anancy Stories がいかに効果的に作用しているか、作家の想像力を刺激し、反コロニアリズムのモチーフとして機能しているかという点についても明らかにすることができた。

さらに研究を深めるために、また世界各国の研究者との意見交流を目的に 6 月 30 日から 7 月 7 日の日程で、イギリス・グラスゴー大学で開催された第 38 回 Society for Caribbean Studies の国際学会に参加し、朝から夜遅くまで議論を交わす機会に恵まれたことは、今までにない非常に有意義な経験となった。

(3)平成 27 年度：

6 月 30 日から 7 月 4 日の日程で、イギリス・バーミンガムで開催された第 39 回 Annual Conference of the Society for Caribbean Studies に参加し、学会発表を行った。海外での発表ということで、少しでも日本的なものをということで、冒頭で古事記や浮世絵、歌舞伎や能、子供向けのアニメにも登場する日本の「土蜘蛛」について視覚的な資料を提示しながら言及し、日本では古来より反体制の逆賊、あるいは妖怪として表象され、社会から排除されるべき存在として描かれてきた「土蜘蛛」に対し、Anancy Stories に登場する変幻自在のトリックスター、Anancy(半神半人の蜘蛛の化身)との社会的、文化的文脈における表象の比較を行った。そこからクレオールの民話に秘められた語りの芸術の系譜を引き継ぐ Brodber のポリフォニックな語りの手法、植民地主義への抵抗の文脈を読み解いた。海外の研究者からもたくさんの称賛の言葉をいただき、研究を通じて共感し、議論を交わしながら互いに高め合える喜びを経験することができた。

平成 28 年度中に出版予定の本『衣装のアメリカ文学』への寄稿論文「イギリスのなかのカリブ―ポーリン・メルヴィル作品にみる偽装と衣装」を執筆した。Melville の Shape-shifter のなかの短編“The Truth is in the Clothes”に着目し、偽り装う天賦の才を持つ Anancy と「衣服」の関係性ついて、イギリス、ノッティングヒル・カーニバルにおける「仮装」と「アフリカ性」について考察を試みた。

期限ギリギリまでできるだけ多くの資料を読み込み、分析を行っていたため、学会発表に基づく論文の作成が遅れてしまったが、Anancy に関する執筆途中の論文が 3 本ほどある。平成 28 年度中にこれらを完成させ、学会誌等において発表予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 岩瀬　由佳、学会報告「第 39 回 The Society for Caribbean Studies に参加して」、『黒人研究』、査読有、no. 85、2016 年、80－81

② 岩瀬　由佳、学会発表要旨「Anancy Stories ―Erna Brodber と Pauline Melville 作品にみるその影響とトリック」、『日本英文学会第 86 回大会 Proceedings』、査読有、1 巻、2014 年、19－20

〔学会発表〕（計 3 件）

① 岩瀬　由佳、Rewriting the Canon: Elizabeth Nunez's Decolonization in *Prospero's Daughter*", 2016 年 7 月 6 日（イギリス　ニューキャッスル　於　ニューキャッスル大学）予定

② 岩瀬　由佳、"Anancy's Creative Web: The Influence of Creole Folktales on Erna Brodber's *Jane and Louisa Will Soon Come Home*", the 39th Annual Conference of the Society for Caribbean Studies 2015 年 7 月 2 日（イギリス バーミンガム　於　The Drum International Arts Centre）

③ 岩瀬　由佳、「Anancy Stories の系譜―Erna Brodber と Pauline Melville 作品にみる影響とトリック」、第 86 回日本英文学会 全国大会　2014 年 5 月 24 日(於　北海道大学)

〔図書〕（計１件）

① 岩瀬　由佳　他、金星堂、『衣装のアメリカ文学』「イギリスのなかのカリブ―ポーリン・メルヴィル作品にみる偽装と衣装」、2016（予定）、頁数は未定

６．研究組織

(1)研究代表者

岩瀬　由佳（Iwase, Yuka）
東洋大学・社会学部・准教授
研究者番号：60595411

研究分担者、連携協力者、研究協力者は特になし。